「ケリー教授と語る会」と『顕彰会誌』第2号

東北公益文科大学教授 三原 容子

今から4年半前（2009年9月）、百数十年の時を経てようやく、ワッパ騒動義民顕彰の碑が鶴岡市水沢の地に建てられました。人々に呼びかけて多額の建立費用を集めたり、設置場所や碑石を選定したりした活動の結晶でした。しかしこれは活動のゴールではなくスタートだったのです。

建立を機にワッパ騒動関係の情報が寄せられるようになり、翌年には顕彰会の記録である『大地動く』が刊行されました。2011年には庄内地域史をテーマとする地域史研究協議会全国大会が鶴岡で開かれ、全国から集まった研究者が庄内史への関心を深めました。さらに酒田を中心とする森藤右衛門顕彰活動が始まり、2012年9月に酒田県庁跡に顕彰碑が建立されました。

こうした動きの中でウィリアム・W・ケリーさんの著書『十九世紀日本における権威への服従と反抗』（1985年）の翻訳研究会が始まったのです。書名には「日本」とありますが、実は1から10まで「庄内」、つまり「19世紀の庄内」に関する本です。

私がケリーさんの名前と著書の存在を知ったのは2002年6月のこと、東山昭子さんの書かれた本がきっかけです。英文タイトルを調べて現物を入手し、序章だけ読みました。それっきり、いつか読む時がくるかもしれないと放置してありました。英語が苦手な私には難しい単語が多くて、よほど時間的なゆとりがなければ読めそうになかったからです。序章には庄内の歴史関係者の名前がずらりと並んでいるので、てっきり庄内ではよく知られているとばかり思っていました。数年後に庄内地域史の検証が進む中で、本を献呈された方々も読んでいなかったことが判明して驚きました。言語の壁は本当に厚い！

さて、世界の多くの人々がワッパ騒動などの庄内地域史をケリーさんの本によって学んでいるのです。どんなふうに描かれているのかを地元の人間が知らないというのは困った話です。ぜひ内容を知っておきたい。また、文化人類学の専門家であるケリーさんが、どのように歴史を描いているのかも非常に興味のあるところです。

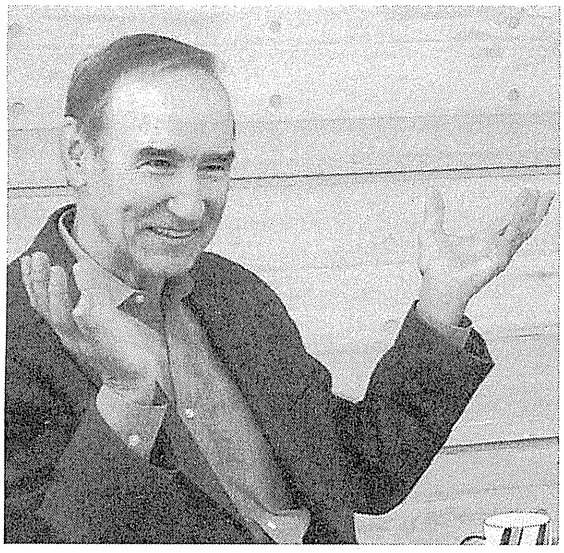
というわけで、英語教育のベテランに訳していただいてから（ケリーさんの英文は非常に難しく骨の折れる作業です）、星野正紘さんを中心に訳語や内容の検討を行うことになりました。ケリーさんに古文書の読み方を指南した前田光彦さん、資料利用を手伝った堀司朗さんもメンバーです。2012年6月以来毎月1回、鶴岡市立図書館の2階で、「この訳語では読み手がわからない」、「ケリーさんの読み間違いだ」等、和やかで賑やかな研究会が続いてきました。私も電子辞書を片手に議論に加わってきました。

その中で気になっていたのは、文化人類学と歴史学、外国人と日本人の見方の違いです。「ここはケリーさんらしいね」と言いながらも、今ひとつつかめない状況だったので、今回「ケリー教授と語る会」が開催されたのは、研究会にとって幸運でした。著者の人となりや執筆に至る経緯についての理解が格段に進み、これからの作業はより充実した楽しいものとなるでしょう。また、庄内の歴史や文化に強い関心を持つ参加者による質疑応答の中で、興味深い新しい課題が提示されました。その一端を紹介します。

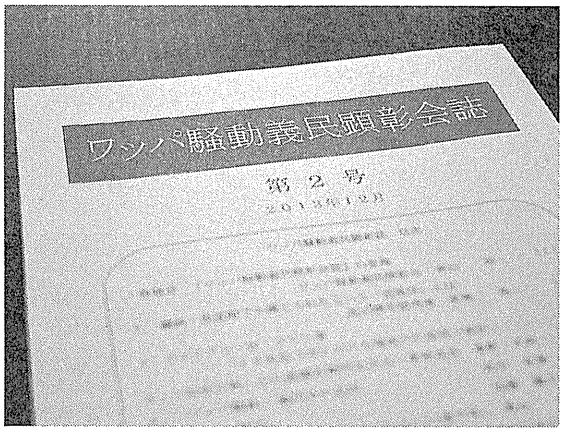
文化人類学研究者がなぜ歴史を研究することになったのか。今の庄内が少しわかると、その前のことが知りたくなる、そしてさらに前が知りたくなると、19世紀の庄内研究に至ったことがわかりました。また、19世紀の庄内は天保の三方領知替から大山騒動、天狗騒動、ワッパ騒動と続くのですが、敵は異なっても正義感、権力に対抗する精神が共通していたのではないかとも話されました。「百姓一揆」というよりも「市民運動」で、階級闘争史観が色あせた今日、非常に興味深い観点です。識字率など、庄内の文化程度が高かったのではないかの話題でも盛り上がり、今後の課題が増えました。

「序章」と「第2章」の訳文は『ワッパ騒動義民顕彰会誌』第2号に掲載されています。他にも致道館の「徂徠学」の謎にせまる論考や「加茂坂トンネル物語」など、ぜひ手にとってお読みください（900円）。顕彰会関係の新聞資料や関連資料目録も付いています。

問い合わせは星野正紘＝電・ファクス0235（22）8010＝へ。



ケリー教授



「ワッパ騒動義民顕彰会誌」第2号